源氏物語新考

源氏物語新考

㊙定價金貳圓參拾錢
特別行爲稅相當額 拾五錢
合計金貳圓四拾五錢

昭和十一年五月一日 初版印刷
昭和十一年五月五日 初版發行
昭和十八年八月二十日 再版發行(千部)

出版會承認
あ450880號

著者 島津久基

發行者 東京都神田區錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院
代表者 森下松衛

印刷所 東京都神田區錦町三丁目十一番地
精興社
代表者 白井赫太郎
(東東四一)

發行所 東京都神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社 明治書院
電話神田(25)二二一一番
四四七四番
九八九番

配給元 東京都神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

(日本出版會會員番號 134505番)

緒言

源氏物語に關してこれまで執筆した大小諸種の論文や隨筆を、古雜誌などから一々探し出して讀む煩勞を省く爲に、一に纒めて刊行してほしいとはかなり以前から要望せられて居り、自分の便益の爲にもさうして置きたいと考へながら、その暇を獲ずに今日に及んだのであつた。此の度明治書院の好意によつて、この豫定の小案が促進せられて、いつの間にか實現を見るやうになつてしまつた。

そこで內容に隨つて大體三部に類別してみた。僅少の補修を加へたものも時にあるが、概ね書卸しのまゝをわざと遺してある。隨時の發表である爲に、論旨や引證やが各章に於て間々重複するものがあるを免れないが、強ひて改刪せぬことにした。右の內「源氏物語總論」は日本文學講座(新潮社)

の「源氏物語研究」を「源氏物語論考」は岩波講座日本文學の「源氏物語評論」を、それぞれ補正改題して收めたもの、又「源氏物語と宮廷生活」はＡＫの國文學講座で放送したもの(中興館刊「日本文學聯講」所收)で、共にこの小さな論集に轉載することを許諾せられた三書肆に謝意を表したい。

それから研究篇の「紫式部名義小考」「四人(五人？)爲時」及び論叢篇の「宇治の二人の姫」「源氏物語か光源氏物語か」の四篇は今回新に書き加へて發表するものである。

昭和十一年三月十二日

著者識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

研究篇

源氏物語總論……一
——心境小說としての源氏物語——
源氏物語の本姿（一）……一
源氏物語の本姿の發見——無名草子と玉の小櫛——宣長とウインチェスタア
寫實小說としての源氏物語（二）……四
平安世相の活寫——昔物語の世界と源氏物語の世界との差異——紫女の寫實主義
理想小說としての源氏物語（三）……五
諸家の源語觀——人生批評としての源語——人生鑑賞としての源語——作者の意圖抱負
——人生描出
心理小說としての源氏物語（四）……九

事件よりも人間＝心――宣長の細評――近松と末摘花卷――昔物語と讀本・草雙紙の外、面描寫――馬琴の病癖

心境小說としての源氏物語　一（五―七）……一四

心理描寫と心境小說――私小說としての日記文學――源氏物語と紫式部日記――源語作者の性格と心境――道長と光源氏――賴通と夕霧――作者と明石上・空蟬その他――「あり〳〵て」――作者の分身としての源語中の人物

心境小說としての源氏物語　二（八）……三〇

源語中の論說――品定の婦人論と日記の輩濟批評――淸少納言と高內侍――謙抑と自負

心境小說としての源氏物語　三（九）……三六

夕顏上と小少將――紫式部の同性愛――禁中引剝の夜の印象――僚輩と源語の女性

物語としての源氏物語（一〇）……四六

「いづれの御時にか」の昔語――說話體の表現樣式と各卷の結文――先進物語との交涉――光源氏の特性と昔男

音樂及び繪卷としての源氏物語（一一―一二）……五三

物語詩――自己陶醉――作者自身のリズム――抒情繪卷源氏物語

結語（一三―一四）……五六
源氏物語の短所・瑕疵――絶大なる源氏物語の文藝値――主觀と客觀との融化・寫實と理想との渾一・小說と詩との合流

源氏物語論考

――客觀小說としての源氏物語 附物の哀れ論――

……五九
文化史の資料としての源氏物語の價値（一―七）……五九
1 桐壺卷の記述に就いての考究
皇子御降誕に關する慣習――皇子御誕生後の御生母の地位――「御前渡り」の解に就いての新舊註批判――里第に於ての病氣平癒の祈禱――元服の儀と典據說
2 他の卷々の記事と史實或は世相との交渉
船樂――蝶鳥の童舞――賀茂祭と車爭――賀、（附說）賀に於ける特殊の慣例――物忌・方違――皇位繼承と後見の有無――新帝受禪と外戚の權勢の消長――皇后と中宮、（附說一）皇太后と后の宮・（附說二）今后の解・（附說三）藤壺中宮の母后
源氏物語の寫實主義とモデル論是非（八―一〇）……八〇
1 源語中の人物とモデル

一條天皇の御發詞の意味――史學者爲章の紫女觀並びに源語觀――紫女は事實小說家に非ず――光源氏のモデル――夕霧大將と朱雀院――須磨・明石兩卷執筆の年次――藤壺

2　部分的一面的のモデル

桐壺・藤壺・弘徽殿――朧月夜――近江君――女三宮と夕顏上――紫上――蒜食の賢女對式部丞と淸少納言對則光

3　源氏物語に映る作家の日常生活の體驗の斷片

紫式部日記の記事と源氏物語――紫式部集・伊勢大輔集等の歌と源氏物語

4　紫女の描出した人生――所謂「此の世の外の事なら」ぬ世界

源氏物語の非寫實的要素、特に先行文學との關係（一一―一四）……九六

1　源氏物語の多面的性質

理想主義者人道主義者紫式部――抒情詩人紫式部――批評家紫式部と馬琴――昔物語の殘滓

2　源氏物語に於ける先行文學の影響

引歌・引詩・引句――漢籍と佛典――宇津保・蜻蛉・土佐・伊勢・竹取・大和・落窪、その他と源氏物語

3　枕草子と源氏物語
枕草子の成立並びに流布の年次――品定の女性論と枕草子の男性論――蒜食賢女の素材と枕草子――雪の山と枕草子――「十二月の月夜」と河海抄所引の枕草子――香爐峰の逸話と總角卷の文――その他の類似
4　紫女の創作觀と創造力
紫式部と傳奇趣味及び紫女の人生觀としての理想主義（一五）……二〇
1　紫女の傳奇小說觀――超現實性の批判
2　源氏物語創生の源泉としての紫女の人生理想
「不變の完全」を求め憧れる心――矛盾のまゝの調和――實人生の生活指針を自己の藝術の中に確立しようとする努力――母の愛――音樂と繪畫をも併せた藝術――紫女の日本魂――物の紛れの照應と作者の理想主義
宣長の物の哀れ論と紫女の物の哀れ觀（一六）……二四
1　宣長の源氏物語觀と物の哀れ論
宣長の解義と物の哀れの種々相――戀愛小說としての源氏物語――物の哀れを知らぬ――物の哀れ知り顔つくる――物の哀れを知り過す
2　宣長と紫女との見解の比較

物の哀れの理念視――中正を得たる物の哀れ――戀愛禮讃論と戀愛危險論――戀愛至上と藝術至上……一二五
虛實皮膜論と紫女の藝術（一七）……一二五
「僞」の中に「眞」を見せる所謂「そらごと」――紫女と近松――虛實皮膜の間――日本の藝術論を貫く大精神――東洋藝術の眞諦

源氏物語に描く作者の自畫像のいろ〳〵……一二九

一、桐壺更衣の母……一二九
二、寡居生活と亡夫の追憶……一三三
三、子女訓育の興味と主張……一三四
四、紫上――「斯くありたき」作者……一三八
五、明石上――「斯くある」作者……一五三
六、明石姫君の乳母……一六三
七、空蟬・槿・玉鬘・藤壺……一六七
八、六條御息所……一七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

九、右近その他……一七六
一〇、結　語……一七八
源氏物語に現れたる自然……一八一
「湖月」と「春曙」――抒情詩的寫景――畫趣――特異の敍景――源氏物語の景物――春と秋――自然描寫に於ける淸女と紫女の比較――人生の背景としての自然、自然と人事との混融――折から・所から・見る人から
紫式部名義小考……一九五
――女房の呼名の研究――
一、紫式部の稱呼の來由に關する諸說。
一、式部とは誰人の官名に因つての名か。
一、呼名の慣例。
一、兄惟規の官歷――式部の名は兄の官名に因みしに非ず。
一、紫式部の名は父の舊官名に因るか。

四人（五人？）爲時……二一
——紫式部傳附說——
藤原爲時——互勢爲時——右衞門尉爲時——宿禰爲時——清原爲時

講說篇

源氏物語と宮廷生活……二九
——源氏物語序說——
一、源氏物語梗概（一）……二九
二、源氏物語梗概（二）——宇治十帖……三〇
三、時代と作者……四〇
四、本文鑑賞（須磨卷の一節）——總評……五三
玉の小櫛から更級日記へ……七一
——源氏物語を鑑賞しようとする人の爲に——

—源氏物語鑑賞の態度とその歴史—歌書としての尊重時代—中世の佛教的見解—近世の儒學者的批判と中世思潮—國學者の源語鑑賞—契沖・春滿・眞淵—宣長の物の哀れ論—孝標女の鑑賞態度—源語講讀是非—五十嵐篤好の源語觀—源語鑑賞の準備と要諦—玉の小櫛から更級日記へ

源氏物語の尊さ・美さ・面白さ……三〇九

源語褒貶種々—難解と面白味—源語惡文論—源語の美趣と訓へ—細川幽齋の旨言—人生批評・時代批判としての源語—紫女の教育理想—紫女の道德觀と藝術觀—祖國藝術の精華

論叢篇

紫女と淸女……三四一

源氏物語と現代作家……三五五

「最近の收穫」—明治以前の文學者と以後の文學者の源語知識—一葉—三重吉—「蒲團」と空蟬—「泥人形」と葵上—六條御息所と心靈科學—女シラノ—「神

かをんなか」――「戀愛人名簿」――「緑の地平線」――日本小説史の進展と源語……三七五
紫式部日記と源氏物語……三七九
宇治の二人の姫……三九〇
源語叢話……三九〇
源氏物語か光源氏物語か……三九〇
源氏物語の人物名……三九三
石山參籠説……四〇九
源氏六十帖……四一二
須磨源氏……四一四
紫文の簡潔味……四一〇
文珠樓の目無鬼……四一三
源語旁筆……四一七
まろの説……四二七

眞淵と宣長……四二八
守部と宣長……四二九
一葉女史と源氏物語……四三〇

研究篇

源氏物語總論

―心境小說としての源氏物語―

一

源氏物語は小說である。と斯う言つたら笑はれるだらう。併し昔の人はさう思ひきつて無遠慮な笑を同音に爆發させなかつたらうことも眞實であらう。今鏡に所謂「作り物語」卽ち假作物語卽ち小說の雄として大體一般に迎へられてゐた事は誤無い。さればこそ狂言綺語の僞りは作者式部を六趣の苦患に陷れ、聖覺法印が供養の諷誦に法の救を仰がしめたのである。けれども亦一方、旣に源氏が創作せられた當時にあつてさへ、日本紀の筆才に儔(たぐ)へられねばならぬほど、史書との限界が一般讀者の――一般作者にすらもの――意識に劃然としてゐなかつたのも事實であり（今日だつて歷史と文學と傳說とを同一視して少しも怪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.